

# 園のおたより



第 7 号

令和6年11月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

ある水曜日、2組のAさんが遊んでいる途中に「今日はお弁当ないの？」と私に聞いてきました。私は、「お弁当ない日だね、今日は水曜日だから」と答えると、Aさんは「なーんだ、残念」と悔しそうに言いました。私の娘は保育園に通わせていましたので、『水曜日はお弁当がない』というのは幼稚園だからと気づき、そして、遠い記憶がよみがえってきました。私は幼稚園時代、水曜日が大好きだったこと、その理由が「お弁当」がなかったことでした。

約半世紀前の私が通った幼稚園では、昼食は仕出し弁当でした。食が細く、好き嫌いが多かった私は、そのお弁当を食べることが苦痛でした。食べられないおかずをどこに隠すか、小さな頭でいろいろ考えていました。蓋や仕切りの間に隠したり、先生に見つかって食べる、食べないの押し問答したりしていました。小学校入学後、仕出し弁当が給食にかわり、さらに苦痛は続きました。嫌いな食材をどう処理するか、トイレに駆け込む、机に隠すなどいろいろ考えました。そして給食の時間はいつも男の子が私のまわりを取り囲み、私が残すであろう飲物やデザートを巡って、じゃんけん大会が開かれていました。小学校の卒業式の思い出は「もうこれで給食を食べなくていいんだ（中学校は給食がありませんでした）」と、感無量であったことです。その後、嫌いなものは食べなくてもよい時代を過ごし、立派に？大きくなりました。

ですので、私は、こどもたちがおいしそうにお弁当を食べている姿を見るのが大好きです。わんぱく揃いの1組さんも、お昼の時間はみんな椅子に座って、保護者の皆様が作ったすてきなお弁当をみんなと一緒に楽しんで食べています。そして、学校給食をおいしそうに食べるテレビ番組も大好きです。「おいしい給食」という番組をご存じでしょうか。1980年代の中学校を舞台に、「給食のために学校に来ていると言っても過言ではない」と豪語するほどの給食好きの先生と、同じく給食が大好きな男子生徒の、給食にまつわる闘いを描いたコメディです。映画化もされました。おいしそうに給食を食べる主人公の姿が大好きで、食事は楽しくおいしく食べることが一番だと再認識させられました。

学校給食は単に空腹を満たしたり、味わったり楽しんだりするだけでなく、食に関する「生きた教材」であり、様々な指導上の目的があります。それらの目的のために、何が何でも残さず食べることを指導するのは間違いであり、完食指導の害が問題視されるようにもなっています。また、こどもの昼食の問題には、お弁当を持参できないこどもの存在や、給食費の未払いなどもあります。世界を見るとフードロスと飢餓が同時に起きており、こどもたちが安心して楽しく味わって食べることができるといえる食事を提供することは、大人の責務といえるでしょう。我が家はどんなにけんかをしていても、食事時は休戦して楽しく食べることがモットーです。皆さんのご家庭でも、1日に1回は家族で楽しくおいしく食事できることを祈っております。

今月初めのある日、3組保育室前のテラスで、黄色のマリーゴールドの花がらを摘みとっていた時のことです（植え替えのために抜いた苗にまだ花が残っていたので、こどもたちの遊びに使えるように採っていました）。1組のひとりがそばにやってきて、「何してるの？」と尋ねてきました。みんなが花の苗の植え替えをしたこと、残っているマリーゴールドを摘んでいることを話して伝えると、“そうなのね”といった顔で私の隣に座ります。しばらくすると、「〇〇ちゃん（自分のこと）、暇だな」とつぶやきました。その一言に対して、日々、不思議と気ぜわしさに追われるような身として、思わず「暇なんて、素敵！」と応えました。

もうしばらくの間、私の隣に座っていましたが、その目は、広い園庭にしっかりと向けている様子でもありました。その後、テラスから少し離れているところに落ちていたオレンジ色のマリーゴールドの花がらの一つ見つけて、「あっ、落ちてたよ。オレンジの」と、拾って見せてくれました。黄色とは違う色の綺麗さを教えてくれているようでした。次には、「石、きれいな石！」と、丸くてすべすべした石を見つけて、持ってきてくれました。自分なりの感じ方で、何か素敵なものを見つけた嬉しそうな表情でした。

「学校＝school」の語源は、ラテン語の「schola スコラ」に由来し、さらにさかのぼると古代ギリシャ語の「shcolē (skholē) スコレー＝暇」という意味の言葉であったという話を、ふと思い出しました。ここでの「暇」は、退屈な気持ちで何となく過ぎていく場ではなく、仕事などから離れて、芸術、文化などを生き生きと生み出していく場という意味だと思います。

現在、小学校、中学校、特別支援学校、高等学校、大学などと並んで、幼稚園も「学校」と位置付けられています(学校教育法)。これらの学校に「暇」というイメージは、なかなか持ちにくいようにも感じます。今回お伝えした姿のように、自身で実感できる生き生きとした「暇」があるからこそ、そこから何か新しい発見があるのかも知れません。大人だけでなく、こどもたちも何だか忙しさを感じている社会の在り方、学校の在り方を、もう一度考えていきたいです。

何か次の新しいことが生まれる前の「暇」がたっぷり保障される、そのようなこども時代を過ごせる幼稚園でありたいと思います。

# クラスだより



## 1くみ

### 「自然に触れる」



11月が始まってすぐに、楽しみにしていた北浦和公園への遠足がありました。公園では、幼稚園にはない遊具で遊んだり、戸外でお弁当を食べたりすることをとても喜んでいました。中でも、1組のみんなが夢中になっていたのは、公園内にたくさん落ちていたドングリ拾いです。木の下にたくさん落ちているのを見つけると「ドングリだ」と目を輝かせながら次々と自分のバックにドングリを入れていきます。ドングリの帽子だけを集める人、皮が付いているものだけを拾う人など一つ一つこだわりながら拾っていました。「こんなにたくさんあったらドングリケーキがたくさんできるね」と嬉しそうな声も聞こえてきました。そこで、1組でもケーキを作ってみることを提案し、数日後、ドングリケーキ作りが始まりました。たくさんドングリがトッピングされたケーキや目や鼻をドングリで作った動物のケーキ、粘土を薄く広げてドングリをトッピングしたドングリピザなど様々な種類のケーキができました。

今月は、少し涼しくなってくると砂場の近くにあるコブシの木からたくさん落ち葉が落ちてくるようになりました。登園してたくさん落ち葉が落ちてると「この葉っぱをたくさん降らせたら綺麗だと思う」と教えてくれたので、一緒に落ち葉を投げ上げてみると、落ち葉の感触やこすれる音にも面白さを感じていました。もっとたくさん落ち葉でやってみるために、葉っぱ温泉を作ることにしました。池の中に葉っぱを入れていくと、他の友達も温泉の場に来ました。葉っぱを投げてシャワーにしたり、高い所から葉っぱの雨を降らせたり、全身で落ち葉と関わることを楽しんでいました。ダイナミックに関わる機会が少ないからこそ、思い切り使えることや全身で落ち葉の感触を感じることに新鮮だったのではないかと思います。

よく見なければ見過ごしてしまうような小さなものも、こどもたちの手にかかれば、わくわくするようなものに変わっていきます。こどもたちが心躍らせている世界をよく見ていき、わくわくすることをこどもたちと一緒に見つけていきたいと思います。



## 2くみ



### 「ぬくもりのある ままごと遊びから思うこと」

空気が冷たくなり冬へ移り変わっていることを肌で感じます。こどもたちは毎朝いろいろな気持ちをもって登園しています。「ああさむいさむい」と言いながら急ぎ足で保育室へ入る人、友達と手をつなぎ温もりを感じながらゆっくり歩く人たち、少し困った表情で自分の声を聴いてほしそうに先生へ向かってくる人。保育室は少しずつ人が増えていくにつれて楽しい気持ちの方へ向かっていく様子があります。いろいろな人が集うことの意味や、あたたかさを感じるひとときです。

ままごと遊びのことを少し話したいと思います。今は「ドングリハウス」という名前がついていて茶や橙や深緑などの温かみのある色の部屋の中には、ドングリが飾ってあったり描いてあったりして心が和みます。この場が大好きな人たちが美味しいものを作ったり、誰かになりきって動いたりしています。「今日は〇〇さんの誕生日だからパンケーキを作っているの」と丸い形の木板をパンケーキに見立ててドングリを上に乗せて飾っています。それからコーヒー豆をカップに入れてテーブルに置いたりサラダを作ったりしてテーブルいっぱい美味しくそうなものが乗せてあります。でも、「さあ食べましょう」とは、なかなかならないのです。「お誕生会が始まるわよ～」と言う声が出て、わたしもわくわくしながら座って待っていますが、「もう食べていいの？」と尋ねてみると「まだよ。だって今ケーキを焼いているから。待っててね」と言うのです。テーブルに美味しいものが乗り切れないほどいっぱいになると、少しの間隙間に、今度は何段にもなるケーキが高く積み上げられていきます。お皿をケーキのスポンジに見立てて組み合わせ高くして、木でできたビーズで飾られていきます。それでも「いただきます」にはなりません。面白いですね。この姿が、もしかしたら、たとえば、旅行は道のりこそが楽しいように、映画は結末までの物語に魅了されるように、結果よりも過程をじっくり味わう中で、没頭することや、いろいろな気持ちをもったりして、この瞬間を楽しみ味わっているのではないかと思います。なんて素敵なのでしょう。



### 3くみ



#### 「美しいものと暮らす」

先日の PTA 主催の親子レクリエーションで素敵なピアノの演奏を聴く機会がありました。改めて日常生活の中で美しいもの、芸術的なものに触れる時があることの価値をしみじみと感じます。

ピアノの演奏を聴いたことをきっかけに、3組では音楽に触れるひとときをもつことにしました。親子レクの中で演奏されたクラシックの名曲や、この時期らしさを感じるようなクリスマスに関連した曲など、耳と心で音楽を楽しむ時間になっています。音楽を聴いた後に子どもたちが話す言葉に耳を傾けていくと、自由な感性で音楽を楽しんでいるのだなと感じる場面が多くありました。モーツァルトの「トルコ行進曲」を聞いた際には、「ジェットコースターみたい」「逃げてみたい」など曲から様々な情景をイメージする人や、「この曲知っている」「違うトルコ行進曲もあるよね」など、生活の中で聴いたことのある曲として親しむ人がいました。クラシックの曲は歌詞がなかったり、メロディが複雑だったりしてただただ聞き流すだけだとよさがわからないこともあるかと思えます。しかし、子どもたちの聴く姿や出てきた言葉を捉えていくと、クラシックとして後世まで残っていく音楽のよさがあるなと感じます。そして立ち止まってじっくり音楽を聴くことのよさを再認識しました。

聴くことだけでなく、子どもたちは自分自身で芸術そのものを創り出しています。先日、栽培したサツマイモのつるを使ってリースを作る人がいました。園内の植物や、ビーズで飾りつけをしていると、ビーズを選ぶ際に「クリスマスカラーがいいよね。でも黄色を入れるとカジュアルな感じになっていいと思うよ」と話す姿がありました。そうやって一つ一つ選んだビーズを、場所を決めて丁寧に接着しました。園ではいろいろなものを自分で作るがありますが、自分が美しいと感じる要素を一つ一つ大切にしながら作る姿がとても素敵だなと感じました。日常の中の美しいものや、それを美しいと思う感覚を大切に、生活していきたいと思えます。